

日向市教育研究所

I	研究主題	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-1	
II	主題設定の理由	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-1	
III	研究目標	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-1	
IV	研究仮説	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-1	
V	研究組織	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-1	
VI	研究の実際			
	1	キャリア教育研究班	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-2
	2	英会話科研究班	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-6
○	引用・参考文献	・・・・・・・・・・・・・・・・	13-10	
○	研究同人			

I 研究主題

児童生徒が意欲的に取り組み、確かな学力と実践力を身に付ける学習指導方法の在り方
～キャリア教育を基軸とした学習指導方法の工夫改善を通して～

II 主題設定の理由

日向市では、平成17年3月に「日向市小中一貫教育基本計画」並びに、学校教育推進のための基本方針である「ひゅうが学校教育プラン」を策定し、「学力向上」や「豊かな心の育成」などを推進しながら、小中一貫教育に取り組んできた。

また、本市は国際貿易港を有し、電子部品や医療器具等の生産において、世界的なシェアを誇る企業が集積しており、理数教育の充実・外国語教育の充実が求められている。

これらのニーズや施策を受け、本研究所では、平成19・20年度には、義務教育9年間を見通した教育課程の工夫など、ソフト面の連携システム開発を中心とした研究に取り組んだ。平成21年度からは、その検証のための国語科、算数・数学科の授業研究を中心とした実践的な研究に取り組み、教材分析の仕方や発問の工夫、話し合い活動の充実など、学力向上に資する授業の在り方について研究を深めることができた。

平成24年度から理科と英会話科に絞り研究を行い、理科においては科学的な見方や考え方を身に付けさせること、英会話科においては英語に慣れ、コミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育てることに取り組んでいる。

特に本年度は、児童生徒の内発的意欲を確かな学力や実践力につなげるため、英会話科において、「実践的コミュニケーション能力の育成」をめざし、キャリア教育において、探究的な学習活動における指導方法の工夫改善に取り組んでいる。

本研究所は、小学校と中学校の教員が一緒になって研究を進め、研究授業及び授業研究会の際は、研究員以外の教員にも参加を呼びかけ、小・中学校から多数参加している。したがって、本研究所における研究成果が各学校の具体的実践につながり、指導方法の在り方を見直す上でも大変意義深い。

III 研究目標

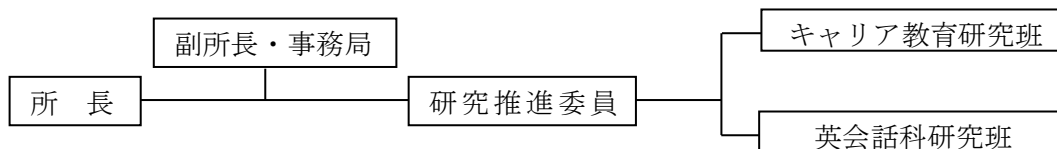
学習指導要領の趣旨を生かした、学力向上に資する授業の在り方について究明する。

- キャリア教育の視点をもとに、探究的な学習活動の楽しさを感じさせながら、児童生徒の確かな学力と実践力を身に付けさせる学習指導方法の在り方
- 英語に慣れ親しみながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育てる英会話科学習の在り方

IV 研究仮説

小・中学校において、キャリア教育の視点を踏まえた授業、探究的な学習の有用性を感じる授業、学習指導要領の趣旨を生かした授業を展開すれば、児童生徒が学習に意欲的に取り組み、確かな学力を身に付けることができるであろう。

V 研究組織



VI 研究の実際

1 キャリア教育研究班

我が国の社会は、グローバル化や情報化、少子高齢化など急激に変化し続けてきている。これに伴い、21世紀を生き抜くための力を育成するためにこれからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成等が求められている。

こうした中、平成23年1月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」の必要性が示されている。この社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力は「基礎的・汎用的能力」として、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの観点において、その内容が示されている。

これを受け、宮崎県キャリア教育ガイドラインにおいて、「自立した社会人・職業人の育成」を目標に、小・中・高の縦の連携や地域・家庭・保護者・企業等との横の連携を図りながら、キャリア教育の視点を取り入れた教育活動の見直しが求められている。さらに、日向市の「日向子どもたちの未来づくりプロジェクト」においても、「学ぶ意欲を高め、『生きる力』と『学力』を向上させること」を目標に、企業、学校、家庭・地域が一体となってキャリア教育を推進していくことが掲げられている。

そこで、本研究班では、児童生徒に学ぶ意義や将来への見通しをもたせながら、学習活動に取り組みせたり、キャリア教育の視点で教育活動を実践したりすることで、児童生徒の学ぶ意欲を高め、生きる力や学力の向上を図るための研究を進めていくこととする。

(1) 研究主題

学ぶ意欲と将来への見通しをもち、たくましく社会を生き抜く児童生徒を育てるキャリア教育の在り方の研究

(2) 研究仮説

学ぶ意欲を高めたり、キャリア教育の視点に立った教育活動を展開したりすれば、児童生徒が将来への見通しをもち、たくましく社会を生き抜く力を育成することができるであろう。

(3) 研究内容

- ア 児童生徒の意識調査の分析
- イ キャリア教育の視点に立った学ぶ意欲を高める指導方法の工夫
 - (ア) 中学校(第2学年)における体験活動を核とした学習指導計画の工夫
 - (イ) 小学校(第5学年)における教科・領域を関連付けた学習指導計画の工夫
- ウ キャリア教育支援センターとの連携

(4) 研究の実際

ア 児童生徒の意識調査の分析

本研究を推進するにあたって、児童生徒の学校生活や将来のことに対する思いを把握するために実態調査を行った。対象児童生徒は、本研究班で授業研究を実施する小学校第5学年・中学校第2学年(いずれも1学級)とし、その後の授業づくりに生かすことができるようにした。調査結果並びに分析は次の通りである。

【キャリア教育アンケート結果 調査対象児童...小学校5年20名 中学校2年33名 平成26年 7月実施】

(4段階評価;とてもそう思う...4 そう思う...3 あまり思わない...2 全然思わない...1)

つながる力(人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力)			中2	小5
1	自分にはよいところがある。	自己肯定感	2.8	2.4
2	自分の気持ちや考えを友だちに正しく伝えることができる。	伝える力	3.0	2.7
3	自分と違う意見や考えをもつ友だちの話を聞くことができる。	聞く能力・態度	3.3	2.9
4	友だちと仲良く過ごすのが得意である。	協調性	3.2	2.9
分かる力(人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力)			中2	小5
5	将来のため、今の学習は大切である。	今の学習と将来の繋がり	3.6	3.1
6	将来のため、学校生活のきまりを守って過ごすのは大切である。	学校のきまりと将来の繋がり	3.6	3.4
7	知りたいことを、本やインターネットを使って調べることができる。	検索能力	3.0	2.8
8	自分で調べたいことが正しいかどうかを友だちと話し合うのは大切である。	協調して解決する力	3.1	3.0
創る力(自己理解・自己管理能力 課題対応能力 キャリアプランニング能力)			中2	小5
9	任された係の仕事などに工夫を加えることが多い。	改善力	2.5	2.7
10	しっかり考えて行動することができる。	熟考・深慮	3.0	2.8
11	努力すれば自分の可能性は広がっていく。	努力と将来の関係	3.9	3.0
12	将来どんな仕事をしたいか考えている。	将来の職業意識	3.1	3.0
やりぬく力(課題対応能力 キャリアプランニング能力)			中2	小5
13	任されたことは最後まで責任をもってやれる。	責任感	3.2	2.9
14	苦手なことでもがんばってやってみることができる。	苦手に立ち向かう気持ち	3.0	2.9
15	自分のことは友だちに流されず自分で決めることができる。	他に左右されない強さ	3.0	2.8
16	問題を解決するために、いろいろな方法を考えることができる。	問題解決能力	2.8	3.0

日向市キャリア教育支援センターで作成したアンケートを活用

アンケート結果から、小学校第5学年では、「つながる力」における「自己肯定感」が低いことがわかった。これは、小規模校に見られがちな人間関係の固定化によるものが原因の一つであると考えられる。従って、小集団に変化と活力を与えるような体験活動等を通して、自分や他者の個性を理解する力を育てていく必要がある。また、中学校第2学年では、「創る力」における「改善力」が低いことから、まずは身近な取組での課題を解決させていく必要がある。例えば学級の係や委員会活動のような一人一人に与えられている仕事を工夫して効率よくこなそうとする態度を育てていくようにする。この取組は、将来仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、解決することができる力へとつながるものとする。

イ キャリア教育の視点に立った学ぶ意欲を高める指導方法の工夫

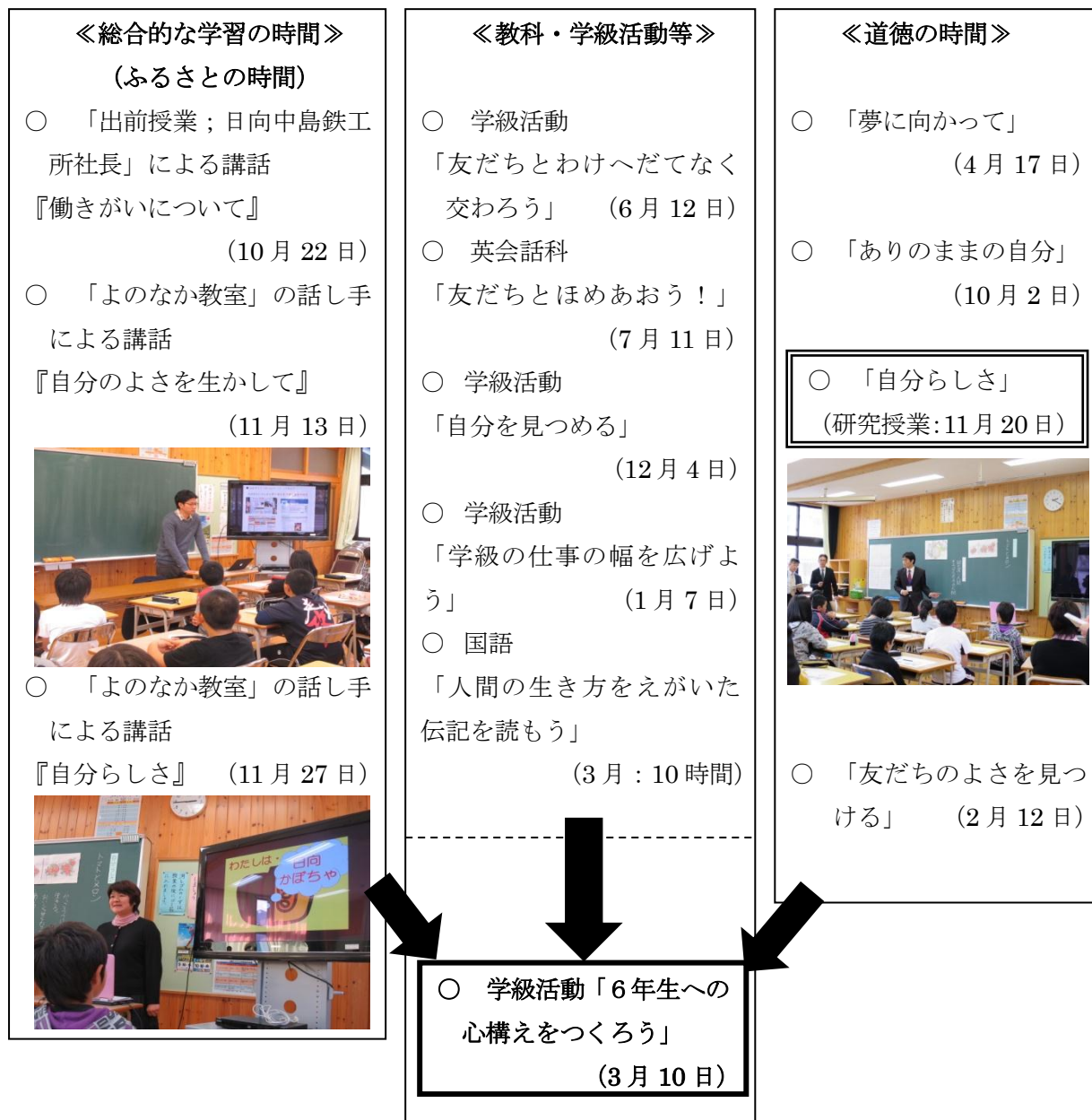
(7) 中学校(第2学年)における体験活動を核とした学習指導計画の工夫

核となる体験活動を職場体験と位置付けて、学級活動と総合的な学習の時間の関連付けを図って指導を行った。職場体験を生徒一人一人にとって充実した学習の場とするために、そこに至る指導の流れが1つのストーリーとなるようにした。また、学校での学びと実社会を結びつけるために、「よのなか教室」をはじめとする様々な機会を通じて、生徒たちが実社会を生きる人々と出会う場を多く設定した。実際の指導の流れは以下の通りである。



(イ) 小学校（第5学年）における教科・領域を関連付けた学習指導計画の工夫

「自分に自信をもって、6年生への心構えをつくっていく」という方向性を児童に示し、自己肯定感を高めるため、教科・領域との関連付けを図りながら、年間を通して指導した。主な活動として、出前授業先の企業の方や「よのなか教室」の話し手に自己肯定感を高めることができるような内容での講話の時間を設定した。実際の指導の流れは以下の通りである。



ウ 日向市キャリア教育支援センターとの連携

本市では、2013年8月に「日向市キャリア教育支援センター」が開所され、日向商工会議所を中核としたキャリア教育の推進が図られている。

日向市では、「日向の大人はみな子供たちの先生」を合言葉として取組が進められている。キャリア教育支援センターでは、コーディネーターが、各学校のキャリア教育の全体計画についての指導助言を行ったり、授業づくりへの支援、職場体験学習先の紹介や開拓、社会人講師の紹介や調整を行ったりしている。また、職員研修や校内研究のサポートも行われており、学校のニーズに合わせた協力体制が確立されている。

(5) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 「よのなか教室」の話し手の方の多様な価値観に触れることで、児童生徒の視野が広がり、将来に向けて前向きに生活しようとする意識が高まった。
- 核となる体験活動と日々の授業とを関連付け、ストーリー性のある授業を実践したことで、教師だけでなく児童生徒も、見通しをもって活動することができた。
- キャリア教育支援センターと連携して事前の授業づくりを進めたことで、指導者も新たな視点を得られ、授業の改善を図ることができた。
- 学校側は、キャリア教育支援センターに依頼するのみの活動に終始せず、目的をもって授業や体験活動等を計画・推進し、長期的な視点をもった教育活動を展開していく必要がある。
- キャリア教育支援センターと連携した授業を実践する上では、学校側と「よのなか教室」の話し手の方との直接のやりとりが多くなるため、打合せの時間を確保する必要がある。

2 英会話科研究班

平成18年3月中央教育審議会外国語専門部会は「審議のまとめ」の中で、グローバル化の進展へ対応し小学校段階における外国語教育を充実させる必要があると報告しており、平成23年度から全国一斉に外国語活動がスタートした。本市においては、平成20年度より市内の全小・中学校において「英会話科」がスタートしている。これは、将来の国際社会において、児童生徒が文化や価値観の違う外国の人々と豊かな人間関係を築くことができる実践的コミュニケーションの基礎を培うことをねらったことである。

本市の児童生徒は、7年目となった英会話科の学習において、ALTや学級担任とともに楽しくコミュニケーション活動に取り組んでいる姿が見られる。しかし、自分から進んであいさつをしたり、自分の思いや考えを豊かに表現したりすることができる児童生徒は多いとは言えない。また、この英会話科の学習が将来の自分にどのように役立ち、どのように関わっていくのかを意識しながら学習に取り組んでいるとは言えない。さらに指導者側の立場からは、ALTの日本語のコミュニケーション能力の違いから、授業前の十分な打合せができないことやALTの配置転換に伴って、指導方法の変更をしないといけない現状がある。

そこで、これからの英会話科の学習は、自分の考えで何かを表現したり、相手に分かりやすく伝えたりする実践的コミュニケーション能力を身に付けさせる必要があることから、目的意識をもって英会話科の学習に取り組む児童生徒の育成に努めなければならない。

以上のようなことから、本年度は、児童生徒が目的意識をもって、楽しく積極的に互いの思いを伝え合う英会話科学習をめざして、研究主題・副題を次のように設定した。

(1) 研究主題及び副題

英語に慣れ親しみながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成
～英会話科における互いの思いを伝え合うための学習活動の工夫を通して～

(2) 研究仮説

英会話科の学習において、児童生徒に単元を学ぶ意義を理解させたり、互いの思いを伝え合うための学習活動を工夫したりすれば、将来の自分の姿をイメージしながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育成することができるであろう。

(3) 研究内容

- ア 本市の英会話科の実態と分析
- イ コミュニケーション活動の工夫と充実
- ウ 英会話科における児童生徒のキャリアプランニング
- エ 学級担任とALTが連携した英会話科授業の基本的な学習指導過程の定着
- オ 異文化及び外国人との交流の場の確保

(4) 研究の実際

ア 本市の英会話科の実態と分析

7年目を迎えた本市の英会話科について、アンケートを行った。

本市では以前にもアンケートを実施したことがある。今回は、英会話科授業に位置付けている Warm up におけるフォニックスの効果や英会話スキルの向上などについて尋ねることとした。

アンケート全体を通して、英会話科の学習は小学生・中学生ともに「好き」と答えた児童生徒の割合が高い。また、「外国人と話したい」「外国に行きたい」と自身のキャリアプランと関連させて英会話科及び英語の学習に取り組んでいる児童生徒が高い割合を示していることがわかった。さらに、英会話科において児童生徒が「好き（得意）」「嫌い（苦手）」と感じている活動も把握できた。

このことから、児童生徒に日々の英会話科の学習に対して目的意識をもたせ、その目的達成のためのコミュニケーション活動を意図的に仕組んでいくことが重要だと考えた。

イ コミュニケーション活動の工夫と充実

学習指導要領「外国語活動編」を受け、内容の取扱い（オ）に着目し、小学1年生から中学3年生までの英会話科の授業においてコミュニケーション活動の充実を図ることとした。具体的な内容については、以下に第5学年の例を示す。

(7) 身近な場面の設定

場面に応じた英語を発話する意欲を高めるために、「買い物をする」「買った材料で料理をする」など実体験を伴う授業を構成する。第1回検証授業では“Let's go shopping”の単元において、サンドイッチの材料を買ったり売ったりする活動を取り入れた。単元の最後買った材料を使って調理をするという計画を立てた。実物の食材を使うことで児童に興味をもたせ、食材がないと調理ができないという意欲付けを行った。

(イ) Greeting や Warm up における児童生徒への支援

Greeting や Warm up はグループの友達同士によるあいさつを取り入れ友達との関わりをもたせるようにした。体調・天気・月日・曜日、好きなもの・苦手なものなど、いくつかのパターンを決めグループ内で交流させた。ALTだけでなく友達からも英語表現をインプットできるようにし、たっぷり英語に触れさせていくようにした。

平成28年7月

英会話科に関するアンケート

日向市教育研究所 英会話科研究班

- 1 英会話科の授業でどんな活動が好き（とくい）ですか。
- 2 英会話科の授業でどんな活動がきらい（にがて）ですか。
- 3 英会話科の授業は積極的に取り組んでいますか。（「はい」「いいえ」のどちらかを○でかこみ、理由も書きましょう。）

「はい」 ↓	「いいえ」 ↓
理由	理由
- 4 英会話科の学習をして、どんな時によかった（役に立った）と思いますか。
- 5 フォニックスの学習が英語を話す時に役に立っていますか。

「はい」 ↓	「いいえ」 ↓
「どんな時に役立ちましたか。」	
- 6 今年度は前の学年より、「英語が話せるようになった」と思いますか。（あてはまるものを○でかこみましょう。）

話せるようになった	変わらない	話せなくなった
-----------	-------	---------
- 7 英会話科の授業で、たくさんの友達と英語を話すためにはどんなことに気を付ければ良いと思いますか。
- 8 英会話科の学習は好きですか。（「はい」「いいえ」のどちらかを○でかこみましょう。）

「はい」	「いいえ」
------	-------

(ウ) Introduction of Target Expression における児童生徒への支援

この段階では、前時の学習をもとに、本時のコミュニケーション活動につながる表現の練習をしていく。最後のインプットの時間もこの段階で行った。

(エ) Communication Activities における児童生徒への支援

この段階では、児童生徒が目標を達成するために積極的なコミュニケーションができるよう意図的な活動を取り入れた。全児童が時間いっぱいそれぞれの立場でたくさんの英語を発話することができた。また、英語の発話によるコミュニケーションだけでなく、ジェスチャーや表情など言葉とは別のコミュニケーション活動にも積極的に取り組んでいた。

(オ) Farewell における児童生徒への支援

本時の学習への取組を評価させるとともに、すばらしい取組を全体に紹介し、称讃することで、次時の活動への意欲の向上を図るようにした。

ウ 英会話科における児童生徒のキャリアプランニング

英会話科を「何のために学ぶのか」「将来にどう役立つのか」など、学ぶ意義を児童生徒が認識して学習に取り組むこと、特に中学生は、自分の将来の夢や姿を思い浮かべるとともに、夢の実現のために今何を学ぶべきかを考えながら学習することが重要であると考え、次の3点を重視して単元を構成することにした。

(ア) 人と人をつなぐ

異言語・異文化をもつ様々な人々とのつながりを意識させる。異なる言語をもつ人々との対話だけでなく、様々な文化背景・価値観をもつ人々、様々な場所で様々な仕事に従事する人々とつながる機会の広がり意識させる。

(イ) 自分を見つめ直す

英語を通して様々な人々とコミュニケーションをする過程において、「自分がなぜ英語を学んでいるのか」「将来、どのような場面で役に立つのか」を意識させ、自分自身の将来の夢や希望につながる学習を展開することで、自分を見つめ直す場とする。

(ウ) 自己の成長を実感する

新しい言語を学ぶことは、恥ずかしさや不安・葛藤を伴うものであるが、その気持ちの中で「今後どのように取り組んでいくのか」など自問自答し自分を成長させる。

本研究所の第2回検証授業では中学校第1学年「買い物」の単元において、上記のような意義を児童生徒が認識できるような活動を一単位時間または単元において取り入れることにした。

導入の段階で、高校における海外の修学旅行、または将来の海外旅行を生徒に想定させ海外での買い物の場面でどのような表現をするのかを考えさせる。全4時間の計画であるが、第1次に「何色が欲しいですか」「私は～がほしいです」の表現を学習する。第2次に「いらっしゃいませ」「Tシャツを探しています」「これはどうですか」を付け加え、第3次において「いくらですか」「〇〇ドルです」と支払い場面を設定する。模擬紙幣を使用させ、通貨単位をドルにしたことで異文化を学ぶ機会にもなった。

第3次まで、買い物における表現をスモールステップで構成し、生徒一人一人が自分の成長が実感できるような学習を展開した。また、授業の終末では、本時においてできるようになったことや次時の学習でできるようになりたいことを発表させ、生徒一人一人を称讃していくようにした。

エ 学級担任とALTが連携した英会話科授業の学習指導過程の定着

学級担任の立場から、全く日本語を話すことができないALTとのコミュニケーションをしなければならない現状がある。

そこで、右のような英会話科授業の基本的な学習指導過程の定着を図るために、夏季休業中に3つの小学校で英会話科研修を行った。

この研修会には3つの小学校の職員他、近隣の学校の職員にも参加を呼びかけ、市内全小学校で同じ学習指導過程で学習が進められるようにするとともに、ALTにも参加を要請した。

この研修会において、英語表現のインプットとアウトプットの割合について共通理解を図った。単元の導入はインプット中心、それから徐々にアウトプットの時間を増やし、終末、特にCommunication Activitiesの時間はアウトプットだけで授業を進めていくことも確認した。

ALT配置転換による指導方法の変更は、学級担任だけでなく児童生徒にも困難が生じることから、一貫した指導方法を定着させるためにALTへの研修会も実施した。

オ 異文化及び外国人との交流の場の確保

(ア) 国際交流イベント「ALTたちと交流しよう」

本市の英会話科の授業は、全て学級担任とALTたちとの連携のもとに行われている。そのため、本市には7名のALTが配置されておりネイティブスピーカーとして大きな役割を果たしている。

そこで、本市教育委員会が国際交流イベント「ALTたちと交流しよう」を主催し、本研究所が運営に参加することとした。このイベントは日頃学習している英会話科の授業における成果を楽しみながらさらに深めていくとともに、市内の他の学校の児童生徒と英語を通して仲良くなりながら国際感覚を身に付けていく機会となった。

(イ) 英会話科室の整備

児童生徒にとって楽しい英会話科の学習を展開するには環境整備は欠かすことのできないものである。また、英会話科全ての授業に携わるALTにおいても、教材の保管・整備は重要であると考え、次の3点から英会話科室の整備に取り組んだ。ここでは日知屋小での取組を紹介する。

a 活動スペースの確保

児童生徒が活動しやすいスペースを確保するために、机・椅子を常設しないようにした。このことで、ゲームやインタビューなど、友達同士でのコミュニケーション活動が充実した。また、活動によっては机・椅子が必要な場合があるので、いつでも出し入れができるように、教室側面に置くようにした。

【日向市英会話科授業の基本的な流れ】

- 1 Greeting (あいさつ)
- 2 Warm up (ウォーミングアップ)
- 3 Introduction of Target Expression (目標表現の導入)
- 4 Games & Activities (目標表現に親しむ活動)
- 5 Communication Activities (コミュニケーション活動)
- 6 Farewell (あいさつ)



b 教材・教具の保管、整備

単元ごとに使用したピクチャーカードなどの教材・教具を棚に収納し、学年別に整理した。また、視聴覚機器（CDプレーヤー、リズムボックス等）や学年共通の教具・教材は別の棚に収納することにした。

c 掲示物の工夫

色、月、季節、道具、果物、野菜、乗り物等、生活の中で使われるもののピクチャーカードや児童生徒が調べた外国の紹介及び世界地図を常設した。児童生徒は、英会話科室に入った瞬間から異文化に触れられるとともに、英会話科を学ぼうとする意欲をもつことができた。

(5) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 児童生徒にとって身近な場面を設定するとともに、実体験がともなうようなコミュニケーション活動を意図的に学習指導過程の中に位置付けることで、児童生徒は活動に興味・関心を持ち、積極的に友達とかかわりをもつことができた。
- 単元の導入で、児童生徒に単元を学ぶ意義を伝えることにより、児童生徒は自分の将来の夢や姿を思いながら英会話科学習に取り組むことができた。
- 夏季休業において、市内3校で教職員向けの英会話科研修を実施したことにより、英会話科の学習の流れや各段階でのゲームの活用など、指導方法の共有化が図られた。
- 「ALTたちと交流しよう」の運営や英会話科室の設置及び整備により、児童生徒は異言語・異文化とふれあう機会が増え、国際感覚を少しずつ身に付けられるようになった。
- ALTに対して研修の充実及びALTと学級担任との打合せの充実を図る必要がある。
- 英会話科の評価の在り方について、再検討する必要がある。

○ 引用文献・参考文献

文部科学省 小・中学校学習指導要領解説

文部科学省 小・中学校キャリア教育の手引き

宮崎県教育委員会 宮崎県キャリア教育ガイドライン

日向市教育委員会 日向市英会話科テキスト「WE LOVE HYUGA」指導の手引き

○ 研究同人

所長	北村 秀秋（教育長）	研究員	長田 健一（財光寺中学校教諭）
副所長	松葉 貴文（学校教育課長）	研究員	黒木 雄治（日知屋小学校教諭）
統括研究員	山田 啓史（平岩小中学校教頭）	研究員	山崎 努（財光寺南小学校教諭）
主任研究員	尾崎 正朗（富高小学校主幹教諭）	研究員	梶原 豪績（寺迫小学校教諭）
主任研究員	藤原 裕司（財光寺南小学校主幹教諭）	研究員	松下 知世（日向中学校教諭）
副主任研究員	田吉正史郎（大王谷学園教諭）	研究員	濱田 祐介（大王谷学園教諭）
副主任研究員	今村 富貴（東郷学園教諭）	事務局	三樹 和幸（学校教育課長補佐）
研究員	平岡 正臣（細島小学校教諭）	事務局	湯地健一郎（学校教育課教育指導係長）
研究員	中武 由記（日知屋東小学校教諭）	事務局	鈴木 重仁（学校教育課指導主事）
研究員	富永 雄喜（東郷学園教諭）	事務局	本山隆太郎（英会話科アドバイザー）
研究員	草刈 淳（富島中学校教諭）		